

18世紀中葉～19世紀中葉の波佐見窯業について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1617

18世紀中葉～19世紀中葉の波佐見窯業について

中野 雄二

はじめに

波佐見町は長崎県の中央北部に位置する。南は佐賀県有田町・山内町、東は佐賀県武雄市・嬉野町、西は長崎県佐世保市、北は長崎県川棚町と隣接する県境の町である(図1)。

天正年間(1573～1591)頃、波佐見は日本最初のキリシタン大名である大村純忠の所領となり、以降、江戸期を通じ大村藩に属していた。なお、江戸期の「上・下波佐見村」と現在の「波佐見町」の領域はほぼ変化無く、波佐見町内に残された窯跡は、そのまま「近世波佐見窯業」の歴史を伝えるものと言える。

波佐見では、安土・桃山末期～江戸初期、1600年前後～1610年代頃に陶器生産が開始される。17世紀前半代には磁器の生産に成功し、17世紀中葉には、町内三股地区から産出する陶石を用いた磁器専業生産体制を確立する。その後、大村藩の庇護の元、波佐見は有田・三川内と並ぶ近世肥前磁器の一大生産地へと発展を遂げていった。明治期以降も窯業は継承され、長崎県最大の窯場として今日に至る。町内各所には、約400年に及ぶ波佐見窯業の足跡を示す登窯の跡が、これまでのところ36基確認されている(図2)。なお、平成12年(2000)にはそのうちの5基の窯と2箇所の窯業関連遺跡が国史跡に指定された。

本稿では、まず、近年の発掘調査によって蓄積された資料及び文献史料に基づいて、主に18世紀中葉(1740～1760年代頃)から19世紀中葉(1840～1860年代頃)に至る、「製品」、「窯道具」、「窯体」、それぞれの推移を概観する。その後、当年代における波佐見窯業の動態について、時代背景を絡めながら考察していきたい。

I 製品(図3～6)

ここで見ていく製品の推移は、筆者が以前提示した編年観(中野2000b)に基づいている。基本的に、18世紀中葉は百貫西窯(宮崎・村川1993)・高尾窯(中野1996)・長田山窯(中野1997)、18世紀中葉～19世紀初頭は皿山本登窯(中野1999)、19世紀前半代～19世紀中葉は永尾本登窯(宮崎・村川1993)の出土品を中心とした。以下、器種毎の推移を年代的に見ていくが、ここでは、18世紀中葉から19世紀中葉における波佐見諸窯の代表的な製品である染付碗・鉢・皿を中心とまとめた。

1. 染付碗(図3・4)

① 1740～1760年代(図3-1～10)

18世紀前半代までは丸形碗を主体としていたが、当年

代に筒形碗、半球形碗、朝顔形碗、高台内を除く外面に青磁釉・内面に染付を施す青磁染付があらわれる。18世紀前半代に盛行していた陶胎染付碗は減少する。装飾については、外面コンニャク印判装飾のものも前代に引き続き多く見られ、見込み装飾については、二重圏線内コンニャク印判五弁花文が一般的である。

<丸形碗>(図3-1～6)

18世紀前半代と同じく、見込み蛇の目釉剥ぎ(1)と、そうでないもの(2～6)が見られる。前者は、裏銘・高台内圏線を伴わず、文様もラフに描かれたものが一般的であるが、後者は、崩れた「大明年製」(2)や「渦福」の裏銘(4)を伴い、文様も前者に比べ丁寧に描かれたものが多い。前者の釉剥ぎ部に後者を重ねて焼いたことを示す熔着例も残されている。前者が下手、後者が上手の製品と考えられる。代表的な文様には、前者では梅樹文(1)、松竹梅文、後者では雪輪草花文(2・3)、二重網目文(4)、外面二重網目・内面一重網目・見込み花文(5)、八つ橋草花文(14)などがある。なお、外面二重網目・内面一重網目・見込み花文については当年代を中心とする。青磁染付も見られ、見込みに二重圏線と菊花文が染付されたもの(6)がある。この製品も基本的には当年代を中心とする。

<筒形碗>(図3-7)

後出のものに比べ、大ぶりで丁寧な作り。口縁内側面に雷文状の文様帯を入れる。外面文様には山水文・菊花文などが見られる(筒形碗A)。

<半球形碗>(図3-8)

後出のものに比べ、やや直立気味に立ち上がり、腰が張る。また、見込みは無文である。外面文様にはコンニャク印判団鶴文がよく見られる(半球形碗A)。

<朝顔形碗>(図3-9・10)

外面に草花文(9)、連続唐草文を描くものも見られるが、青磁染付が一般的であり、基本的に口縁内側面に四方襷文、見込みには二重圏線内コンニャク印判五弁花文が染付されている(10)。この碗は蓋を伴う。なお、波佐見においてこのような蓋付碗は、基本的に当年代から生産されるようになる。

② 1760～1770年代(図3-11～22)

前代と同じく、丸形碗、筒形碗、半球形碗、朝顔形碗が見られる。外面コンニャク印判装飾は依然として多用されている。見込み装飾については、一重圏線内コンニャク印判五弁花文が多くなり、また、見込み中央部に角張った

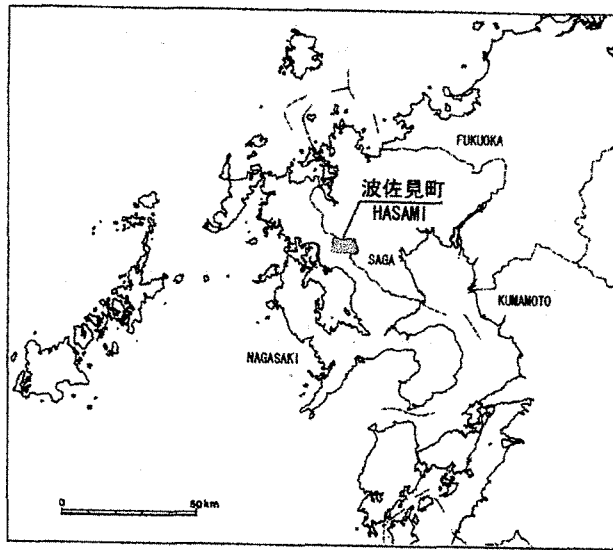
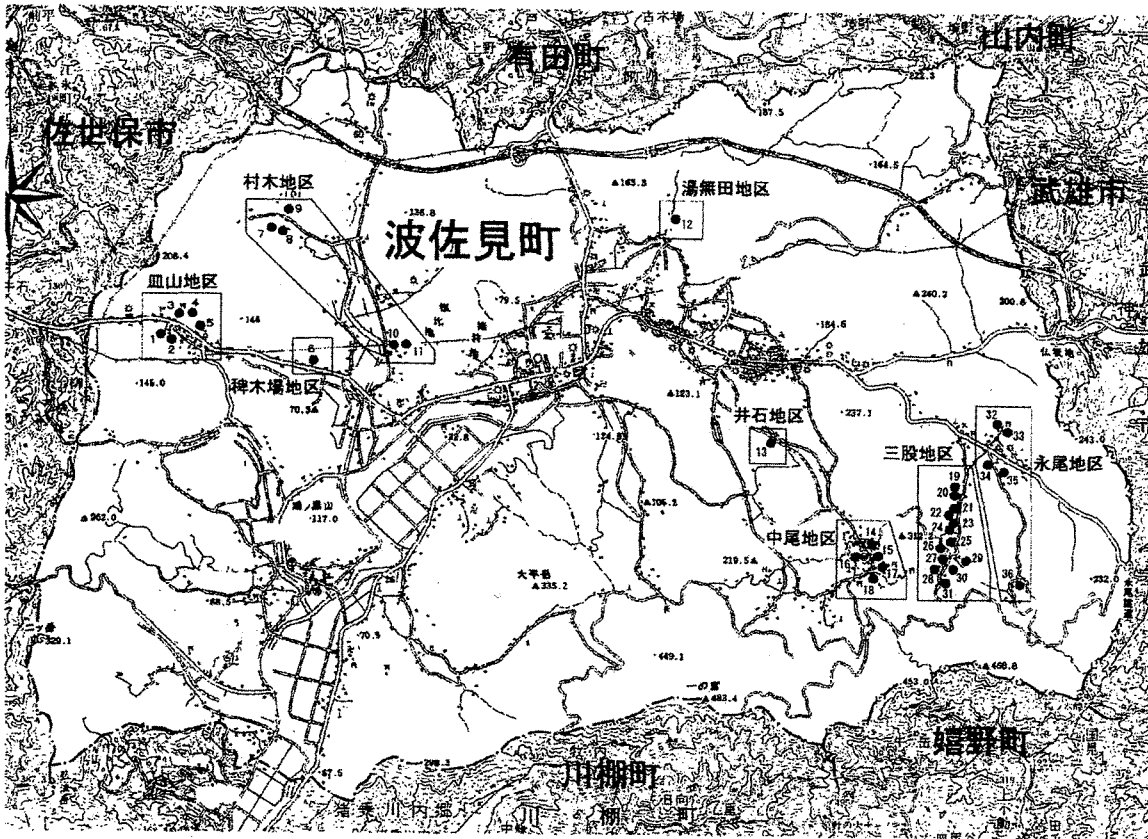


図1 波佐見町位置図



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 向平窯跡 | 9. 山似田窯跡 | 17. 白岳窯跡 | 25. 三股本登窯跡 | 33. 永尾高麗窯跡 |
| 2. 血山本登窯跡 | 10. 百貫西窯跡 | 18. 広川原窯跡 | 26. 三股上登窯跡 | 34. 智恵治窯跡 |
| 3. 高尾窯跡 | 11. 百貫東窯跡 | 19. 咽口窯跡 | 27. 貫窯跡 | 35. 中原窯跡 |
| 4. 深川内窯跡 | 12. 鳥越窯跡 | 20. 咽口新窯跡 | 28. 実窯跡 | 36. 木場山窯跡 |
| 5. 辺後ノ谷窯跡 | 13. 長田山窯跡 | 21. 仕立窯跡 | 29. 三股新登窯跡 | |
| 6. 下榊木場窯跡 | 14. 中尾下登窯跡 | 22. 三股下窯跡 | 30. 鳥居窯跡 | |
| 7. 畑ノ原窯跡 | 15. 大新窯跡 | 23. 三股青磁窯跡 | 31. 三股上窯跡 | |
| 8. 古血屋窯跡 | 16. 中尾上登窯跡 | 24. 三股古窯跡 | 32. 永尾本登窯跡 | |

図2 波佐見町内古窯跡分布図

「寿」字（寿字文A）(20)を入れたものがあらわれる。

＜丸形碗＞（図3-11～17）

小・中法量のものについては基本的な様相変化は認められないが、当年代に入り、高台がバチ状に外傾する大ぶりの碗（丸形高台外傾碗）(16)、高台が内傾する大ぶりの碗（丸形高台内傾碗）(17)があらわれる。両者は蓋を伴う。染付と青磁染付が見られ、口縁内側面に二条の圏線もしくは四方襷文、見込みに一重もしくは二重圏線内コンニャク印判五弁花文を施す。なお、丸形高台内傾碗については当年代を中心とする。

＜筒形碗＞（図3-18・19）

前述した大ぶりの筒形碗Aはなくなり、小ぶりのもの（筒形碗B）があらわれる。基本的に、口縁内側面に二条の圏線、見込みに一重もしくは二重圏線内コンニャク印判五弁花文が施されている。外面文様には格子文(18)、寿字に雪輪文(19)、コンニャク印判松皮菱文などが見られる。青磁染付も見られ、口縁内側面には四方襷文を巡らしたものが多く。

＜半球形碗＞（図3-20～22）

半球形碗Aは減少し、これよりも小ぶりで丸味を帯びた器形のものが見られる（半球形碗B）。一般的に、口縁内側面に二条の圏線、見込みに一重もしくは二重圏線内コンニャク印判五弁花文を施す（半球形碗B1）。外面文様には星梅鉢文、雪輪文、笹竹文(20)、孟宗図文(21)などが見られる。波佐見と同じ大村藩領の窯である長崎県長与町の長与窯では、高台内に明和4年（1767）銘を伴う半球形碗B（22）が出土している（宮崎・川口・中村2002）。

＜朝顔形碗＞

基本的な様相は前代とほぼ同じである。

③ 1780～1810年代（図4-1～11）

1780年代には広東形碗が新出する。丸形碗、筒形碗、半球形碗、朝顔形碗は依然見られる。外面コンニャク印判装飾は、当年代中に廃れていく。見込み装飾については、一重圏線内コンニャク印判五弁花文が主流となり、二重圏線は見られなくなる。また、寿字文Aは減少し、寿字の六画目を釣り針状に曲げた「寿」字（寿字文B）(4・11)が増加していく。前代までは、見込み蛇の目釉剥ぎ部に薄く溶いたアルミナを塗布するものが一般的であったが、当年代以降、不透明な白濁したアルミナを塗布する例が見られるようになる。

＜丸形碗＞（図4-1～5）

皿山本登窯では、雪輪草花文(2)、二重網目文、八つ橋草花文の碗は、当年代の早い段階には生産を停止するようである。見込み蛇の目釉剥ぎ梅樹文・松竹梅文の碗も同様であり、替わって、星梅鉢文やコンニャク印判菊花文・手描き折松葉文(3)が多くなる。丸形高台外傾碗(4・5)は依然見られるが、これまでのところ次年代に登場する端反形と

の共伴例・熔着例が見当たらず、当年代中に生産を停止するものと見られる。

＜筒形碗＞（図4-6・7）

基本的な様相は前代とほぼ同じであるが、当年代に限り、白磁で胴部に鉄錆を廻したもの(6)が見られる。

＜半球形碗＞（図4-8・9）

半球形碗Bが主流となる。また、当年代に入り、腰部・高台部外面・口縁内側面・見込みに染付圏線を施さないもの(9)があらわれる（半球形碗B2）。

＜朝顔形碗＞

染付は減少し、青磁染付にほぼ限られるようになる。

＜広東形碗＞（図4-10・11）

出現期には高台内に一重の圏線を入れたものが見られる(11)。基本的に、見込みには寿字文Bが入れているが、出現期に限り、コンニャク印判五弁花文を施したもの(10)が散見される。外面文様には星梅鉢文(10)、東屋山水文(11)、蛇籠草花文、捻文などがある。つまみの径が大きい蓋を伴う。

④ 1810～1860年代（図4-12～25）

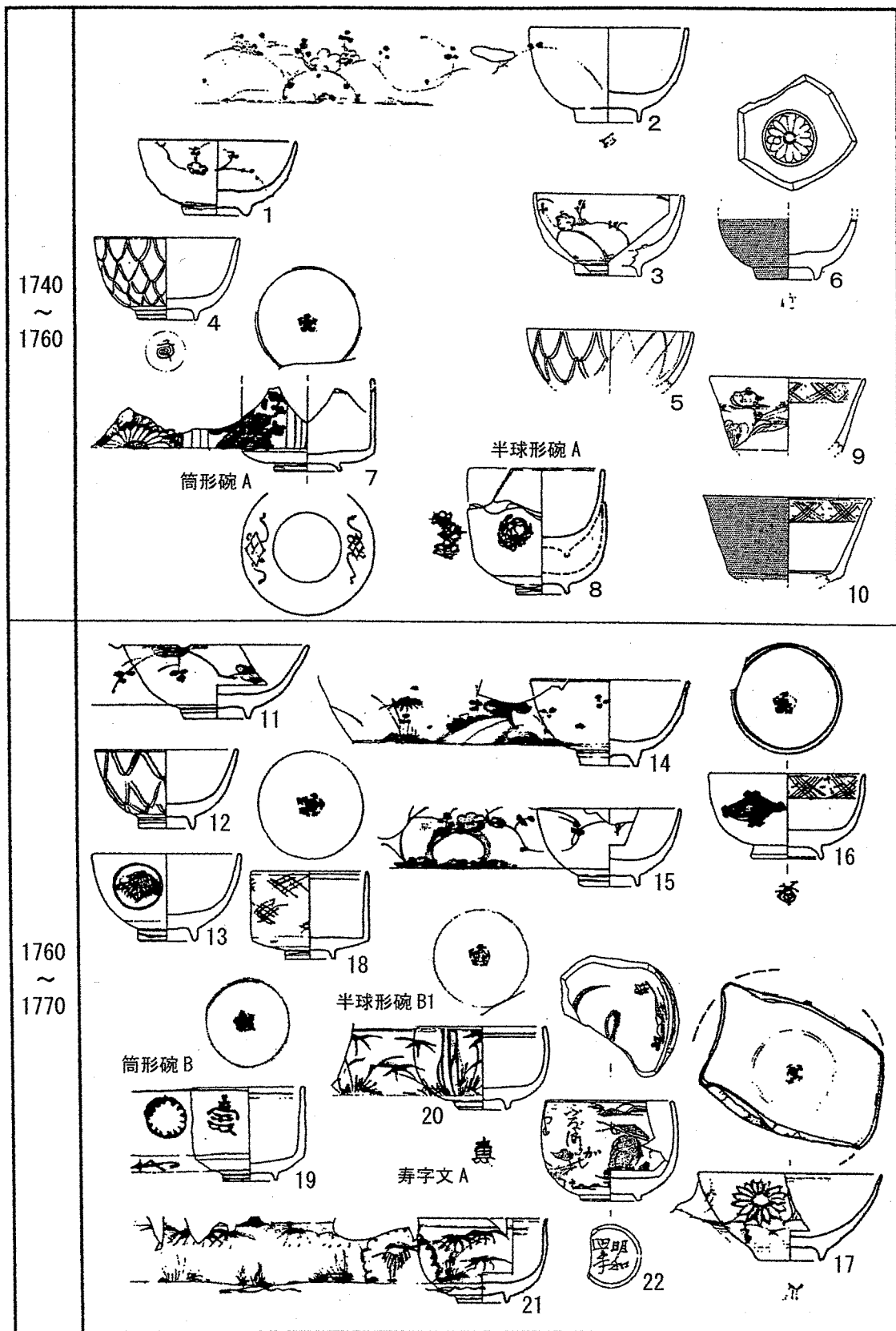
文化年間（1804～1818）頃になると筒形碗と朝顔形碗は姿を消す〔註1〕。一方、端反形碗、筒丸碗〔註1〕が出現する。また、当年代中に平形碗・筒端反碗もあらわれる。以上は、明治期にも生産が続けられる。外面装飾では、コンニャク印判及び青磁染付はなくなり、手描き染付が主体となるが、外面飴釉・内面透明釉の掛け分け製品(24)があらわれる。また、前代には見られなかった、線描きのみで文様をあらわす「素描き」や、前代では少なかった墨弾きの技法が用いられるようになる。見込み装飾は、寿字文Bを簡略化した「寿字」(寿字文C) (15・16) や、格子文、斜格子文(17・21)、波濤文などを描いているものが一般的となる。しかし、永尾本登窯などでは未だ見込みにコンニャク印判五弁花文も施したもの(22)も確認されている。見込み蛇の目釉剥ぎ部への白濁したアルミナ塗布は、江戸末期・明治初期の製品に多く、19世紀中葉頃には普遍的に行われていたと考えられる。

＜丸形碗＞（図4-12～14）

永尾本登窯の物原同一層から、雪輪草花文碗(12)、二重網目文碗(13)が端反形碗と共に出土している。永尾本登窯では19世紀代にも上記の製品を生産していた可能性が高い。但し、当年代の前半には消えていくものとみられる。なお、先述した皿山本登窯とは異なる様相を示しており、波佐見諸窯における窯毎の製品様相の差異が窺える。その他の文様には丸文などが見られるが、当年代は丸形碗自体少なくなり、文様のバリエーションも乏しい。

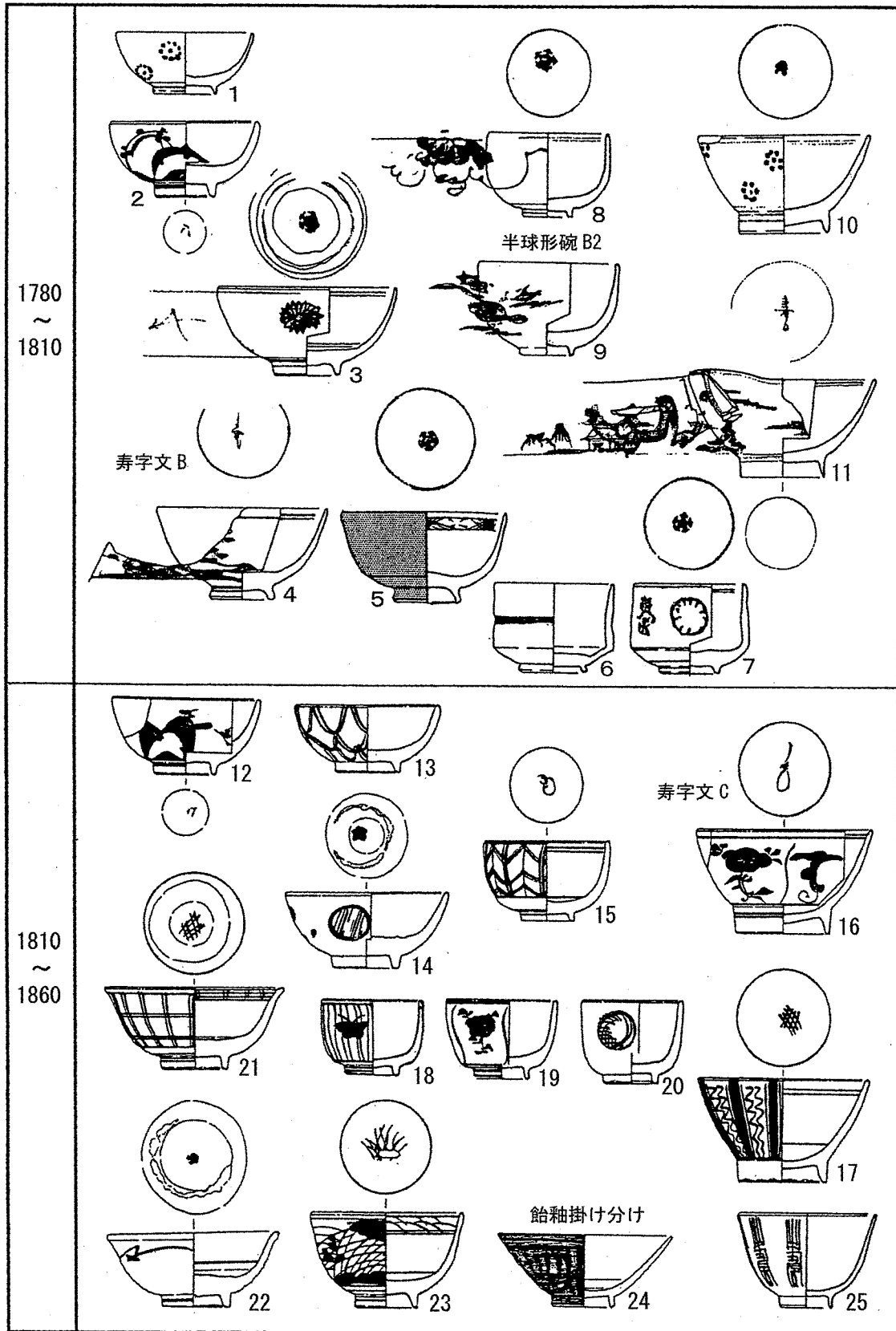
＜半球形碗＞（図4-15）

皿山本登窯・永尾本登窯の物原同一層で端反形碗との共伴例があり、19世紀代にも半球形碗の生産は依然続けら



S=1/4
 1・2：長田山窯、3・5～7・9・10：高尾窯、4：百貫西窯
 8・11～21：皿山本登窯、22：長与町長与窯

图3 染付碗 ①

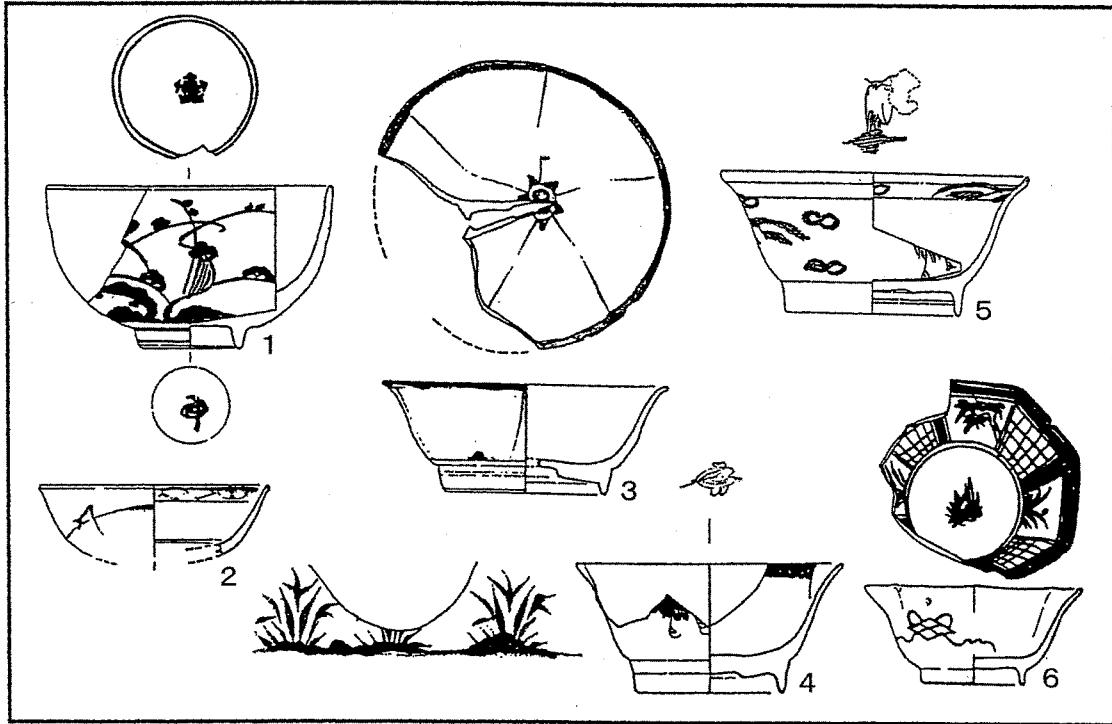


S = 1/4

1・3～11・25：皿山本登窯、2・12～15・21・22：永尾本登窯

16・17：三股新登窯、18～20・23・24：中尾上登窯

図4 染付碗 ②



S=1/4

1 : 三股新登窯、2 : 皿山本登窯、3 : 三股本登窯、4 : 三股上登窯、5 : 長崎市瀬古窯、
6 : 西有田町広瀬向2号窯

図5 染付鉢

れたことが理解できる。これまでのところ明治期の製品には見当たらないため、当年代中に生産停止したと考えられるが、その時期については絞り込めていない。

＜広東形碗＞（図4-16・17）

天保9年（1838）11月の書き付けを伴う文書＜『釜方日雇並諸職人賃銭極』（中島1936）＞に、「小広東」、「中広東」の記述があり、少なくとも1830年代末までは広東形碗が生産されていたことが分かる。この広東形碗も明治期の事例は無く、1830年代から1860年代の間に生産を停止した可能性が高い。文様には、仙芝文(16)、よろけ縞文(17)などが見られる。

＜端反形碗＞（図4-21～23）

当年代における碗の主力製品。1810年代頃に出現し、明治期に入っても生産が続けられる。多くの文様が見られるが、二重格子文(21)、折松葉文(22)、薄文(23)、一重網目文、海浜風景文、笹文などが代表的な文様である。熔着資料から、一般的に、簡素な文様で且つラフに描かれた二重格子文・折松葉文などの下手の碗は見込み蛇の目釉剥ぎされ、その上に、比較的薄手で文様も描き込まれた上手の海浜風景文などの碗を重ねて焼いていたことが分かる。但し、後者には、後述する足付きハマの痕跡が残されたものも散見される。

＜筒丸碗＞（図4-18～20）

端反形碗と同様、1810年代頃にあられ、明治期にも生

産されていた。文様には虫籠文(18)、仙芝文(19)、丸文(20)、格子文などが見られる。

＜平形碗＞（図4-24）

胴部が直線的に開いて立ち上がる碗。波佐見では中尾上登窯出土品に見られる（宮崎・村川1993）。飴釉・透明釉の掛け分けが多い。明治期にも引き続き生産されている。

＜筒端反碗＞（図4-25）

深めの端反形碗であり、蓋を伴う。端反形碗と異なり、圏線装飾は施されない。当年代の後半にあられると考えている。

2. 染付鉢（図5-1～6）

波佐見では17世紀後半代に海外輸出用の鉢を量産していたが、18世紀以降、その生産は縮小する。

①1740～1810年代（図5-1・2）

＜丸形鉢＞（図5-1）

雪輪草花文、八つ橋草花文などが見られる。丸形碗をそのまま大きくしたもの。1は文様及び見込み装飾等から見て1740～1770年代と推定される。

＜端反形鉢＞（図5-2）

外面に折松葉文、口縁内側に連弧状の文様帯を入れる。見込みに一重もしくは二重圏線内コンニャク印判五弁花文が施され、見込み蛇の目釉剥ぎされたものが多い。類品は先述の長与窯にも見られる（宮崎・川口・中村2002）。1740～1810年代。

②1810～1860年代(図5-3～6)

＜朝顔形鉢＞(図5-3～6)

朝顔形の鉢で、高台は一般に蛇の目凹形である。型打成形のものも見られる。波佐見では、とくに三股地区の諸窯、三股新登窯(中野2004b)、三股上登窯、三股本登窯(中野2000a)に多い。なおこの製品は肥前帯で生産されている(5・6)。

3. 染付皿(図6-1～12)

これまでのところ、18世紀中葉以降の染付皿については、良好な資料に恵まれておらず、染付碗と比較して年代的な様相変化が十分に把握されていない。よって、ここでは器形・分量毎にそれぞれのおおよその年代を提示した。

＜丸形小皿＞(図6-1～3)

文様構成等から3種類に大別される。

A: 見込みにコンニャク印判五弁花文、二重圏線で区画された内側面に連続唐草文などを描く(1)。裏文様は折松葉文・蛇唐草文など。高台内に一重圏線と、崩れた「大明年製」及び「渦福」銘を入れる。裏文様・高台内は無装飾のものも見られる。

類品は「明和5年(1768)～19世紀前葉」とされている東京都市ヶ谷本村町遺跡263号遺構(池田ほか1995)、寛保元年(1741～文政2年(1819)に存続期間が押さえられている東京都千代田区和田倉遺跡8号遺構(後藤ほか1995)などに見られる。生産年代は18世紀中葉～19世紀前半代と捉えておく。

B: 内面全体に文様を描く。とくに東屋山水文が顕著に見られる(2)。裏文様・高台内は無装飾のものが多い。型打され、口鏽を伴うものも見られる。

明和6年(1769)の紀年銘資料を伴う東京都千代田区尾張藩麴町邸跡SK317(後藤ほか1994a)、寛政4年(1792)の火災に伴う片づけ土坑である東京都千代田区隼町001号遺構(成瀬2000)、文政6年(1823)の火災による廃棄と推定されている東京都千代田区和泉伯太藩上屋敷跡第1号遺構(後藤ほか1994b)などで類品が出土している。また、この製品は明治期にも引き続き生産されている。以上から、生産年代は18世紀後半～19世紀代と考えておきたい。

C: 見込み蛇の目釉剥ぎされ、内側面に格子文等が描かれる(3)。見込み中央部に草文・格子文等を入れたものも見られる。裏文様・高台内は無装飾。見込み蛇の目釉剥ぎ部には白濁したアルミナを塗布するものが一般的である。

端反形碗との熔着資料が見られる点、また、存続期間が慶応元年(1865)～明治2年(1869)に限定される下関市奇兵隊陣屋跡(上山1997)から類品が出土している点から、19世紀前半～中葉を中心に生産されていたと判断される。

＜丸形五寸皿＞(図6-4～6)

丸形五寸皿は18世紀前半代も生産されている。前半代

は様々な文様が見られたが、18世紀中葉以降になると、文様のバリエーションは激減するようである。以下の2種類が挙げられる。

A: 二重斜格子文皿(図6-4)

見込み蛇の目釉剥ぎ、内側面には二重斜格子文が描かれている。裏文様は描かれず、高台内も無装飾。見込み蛇の目釉剥ぎ部には一般的に薄く溶いたアルミナが塗布されている。

この皿は18世紀前半代から引き続き生産されているが、18世紀中葉以降の製品は、前代と比べ、二重斜格子文が直線的且つラフに表現されている。皿山本登窯では広東形碗出現期の物原層からは出土しておらず、1770年代には生産を停止したものとみられる。

B: 菊唐草文皿(図6-5・6)

見込みにコンニャク印判五弁花文、内側面に菊唐草文を描く。一般的に見込みは蛇の目釉剥ぎされ、釉剥ぎ部には薄く溶いたアルミナが塗布されている。裏文様・高台内装飾は認められない。この皿も18世紀前半代から生産されているが、中葉以降の文様は省略化されラフになる。また、高台も中葉以降、徐々に基筒底状に変化していくようである。永尾本登窯では端反形碗との熔着例があり、19世紀前半代までは生産されていたと考えられる。

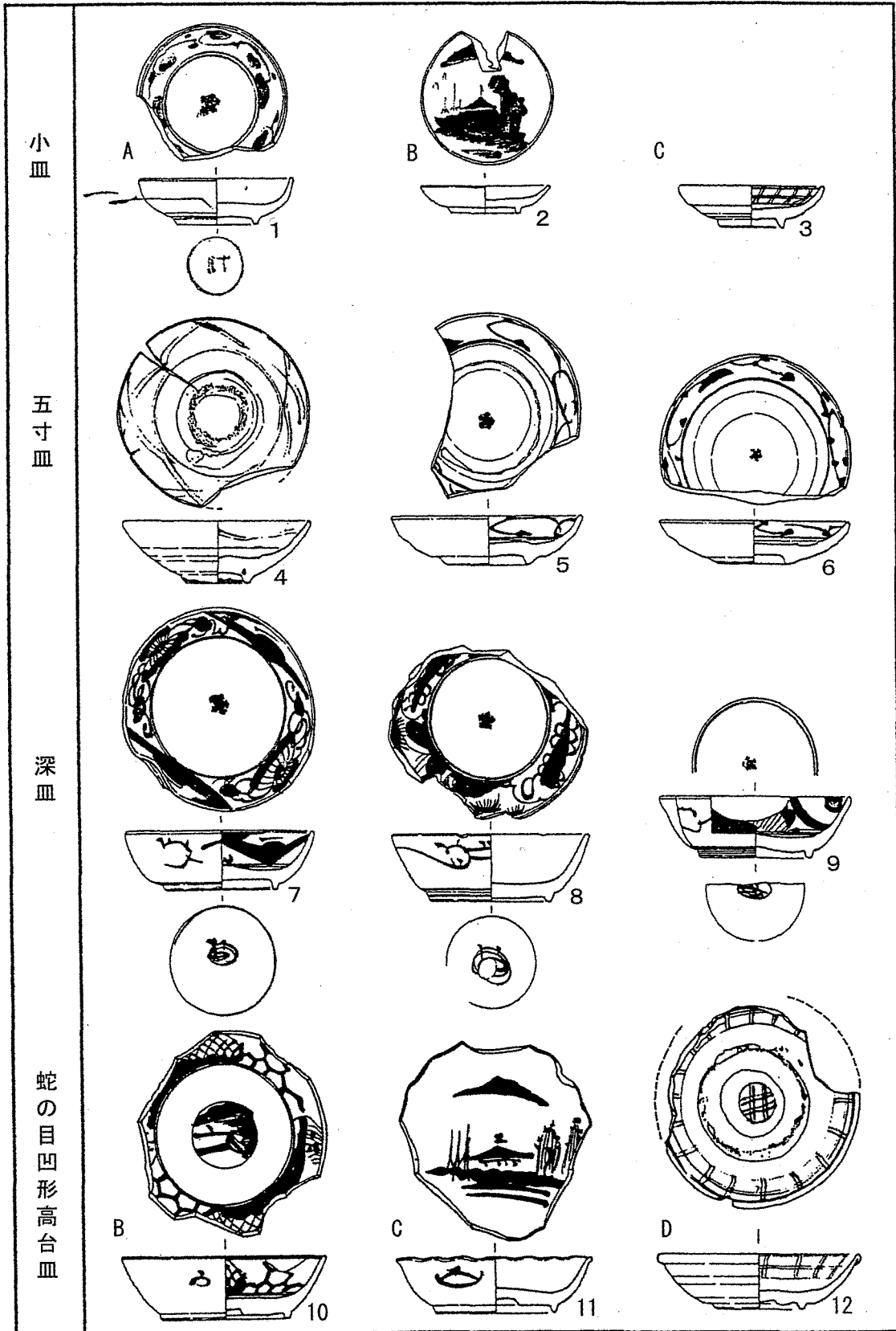
＜深皿＞(図6-7～9)

丸形五寸皿よりも文様のバリエーションが豊富である。基本的に、見込み中央にコンニャク印判五弁花文、二重圏線で区画された内側面には様々な文様を描かれる。裏文様は蛇唐草文が一般的で、高台内の一重圏線の中には、崩れた「渦福」・「一重角枠内渦福」などが施されている。型打による輪花口縁や口鏽を伴うものも見られる。

深皿は18世紀前半代に生産開始されているが、18世紀中葉以降、量産が開始されるようである。18世紀前半～中葉にかけては端反形のものも見られるが、18世紀中葉以降は丸形にほぼ限定される。菊唐草文五寸皿と同じく、永尾本登窯では端反形碗との熔着例が見られ、19世紀前半代まで生産されていた可能性が高いなお、この深皿は永尾本登窯及び三股地区諸窯で多く生産されている。

＜蛇の目凹形高台皿＞(図6-10～12)

高台内中央部を円形に削り込み、その周囲を蛇の目釉剥ぎした皿。机・膳などの接触面を傷つけないよう高台豊付部に施釉するために、蛇の目釉剥ぎ部にハマなどの窯道具を当て、浮かせて焼成された。見込みに足付きハマが熔着したものも見られる。一般的に深皿である。なお、長田山窯では、18世紀前半代と推定される物原層から蛇の目凹形高台の青磁五寸皿が出土しているが、出土状況からみて、一過性の強い特殊な製品と判断される。これまでのところ、18世紀前半代に操業していた他の波佐見諸窯から出土した例は確認されておらず、蛇の目凹形高台皿は基本



S = 1/4

1・2 : 三股古窯、3・10・11 : 三股新登窯、4 : 長田山窯、5～9・12 : 永尾本登窯

図6 染付皿

的に18世紀中葉から生産開始されたものとみられる。

資料に乏しく判然としていない点も多いが、文様等の特徴から以下の4種類に分類される。

A：若干端反気味の輪花口縁で、外面と高台内凹部に青磁釉、内面は染付された皿。

高尾窯廃窯期に比定される遺物堆積層に含まれており(中野 2004a)、18世紀中葉頃と考えられる。

B：見込み中央に染付で円形枠、その中に船帆などの文様を描き、二重圏線で区画された内側面に様々な文様を入れた皿(10)。丸形と口縁端部を肥厚させたものが見られる。裏文様には宝文などがある。

永尾本登窯の物原では、広東形碗出現以前の層に含まれていることから、1780年代以前に生産が開始されたものとみられる。また、永尾本登窯では端反形碗との熔着例も見られ、19世紀前半代に生産されていたことは間違いない。明治期の製品にもあり、19世紀中葉頃にも依然生産は続けられていたようである。

C：内面の全体に文様を描いたもの(11)。小皿と同じく、文様は東屋海浜風景文が顕著に多い。器形では、丸形、口縁端部を肥厚させたもの、端反形があり、型打成形による口縁輪花、口鏤も見られる。裏文様には宝文などがある。

初現時期は不明であるが、永尾本登窯の端反形碗を含む物原堆積層から出土しており、1810年代頃には生産されていたと考えられる。採集資料には嘉永5年(1852)銘を有するものがあり、また、明治期の製品にも見られ、19世紀中葉に生産されていたことは確実に言える。

D：高台内中央部を円形に一段削り、形状は蛇の目凹形高台皿に類似するが、高台内を蛇の目釉剥ぎせず、畳付のみを釉剥ぎした皿(12)。A～Cとは異なり見込みは蛇の目釉剥ぎされているものが一般的で、釉剥ぎ部には白濁したアルミナが塗布されている。見込み中央と内側面にラフに格子文などを描き、裏文様を伴わないものが一般的である。上述のB・Cの文様が描かれたものも散見される。

高台内が蛇の目釉剥ぎされていないにもかかわらず、高台中央部が一段削り込まれており、蛇の目凹形高台皿の持つ本来の意味が失われ形骸化している。このことから、A～Cの蛇の目凹形高台皿よりも後出のものと予想される。明治期にも見られることから、生産年代は19世紀中葉～後半代と考えられる。

ここで、18世紀中葉～19世紀中葉における染付碗・鉢・皿の推移についてまとめておきたい(表1・2)。

18世紀中葉(1740～1760年代)は、全期間を通じて、新たに出現した器形—新出器形—の全器形数に占める割合が最も高く、更に、18世紀前半代と比べても、器形数及び新出器形の割合は共に著しく増加していることが分かる。また、前半代には見られなかった外面青磁・内面染付の青磁染付碗があらわれ、それまでは一般的に無文であった見

込みに、二重圏線やコンニャク印判五弁花文、または、菊花文などの文様を入れるようになる。また、蓋が伴う碗もこの段階にあらわれ、以降、量産される。このように、18世紀中葉に入ると、器形構成・器形数・装飾法・施文箇所など、製品様相の多くの面で革新的な変化が見られる。

18世紀後半代(1760～1770年代)は、大ぶりの蓋付丸碗の登場を見ているが、中葉よりも新出器形の割合は減少している。大ぶりの筒形碗Aから小ぶりの筒形碗Bへ、または、見込みの二重圏線が一重へとといったマイナー・チェンジは行われるものの、前代でみたような大きな変化は看取されない。当年代は、基本的に、18世紀中葉に成立した製品様相を踏襲していた段階と言えよう。

18世紀末～19世紀初頭(1780～1810年代)にかけては、新出器形数、その割合共に低い数値を示している。また、その他の諸様相も前代の18世紀後半代とは余り変化は認められない。しかし、次の年代にも多く生産された広東形碗と朝顔形鉢、また、蛇の目凹形高台皿は、当年代に生産開始または生産量が増加している。以上のように、この年代も、基本的に18世紀中葉に成立した製品様相を引き継いでいるが、新たな動きも同時に内包していたことが言える。

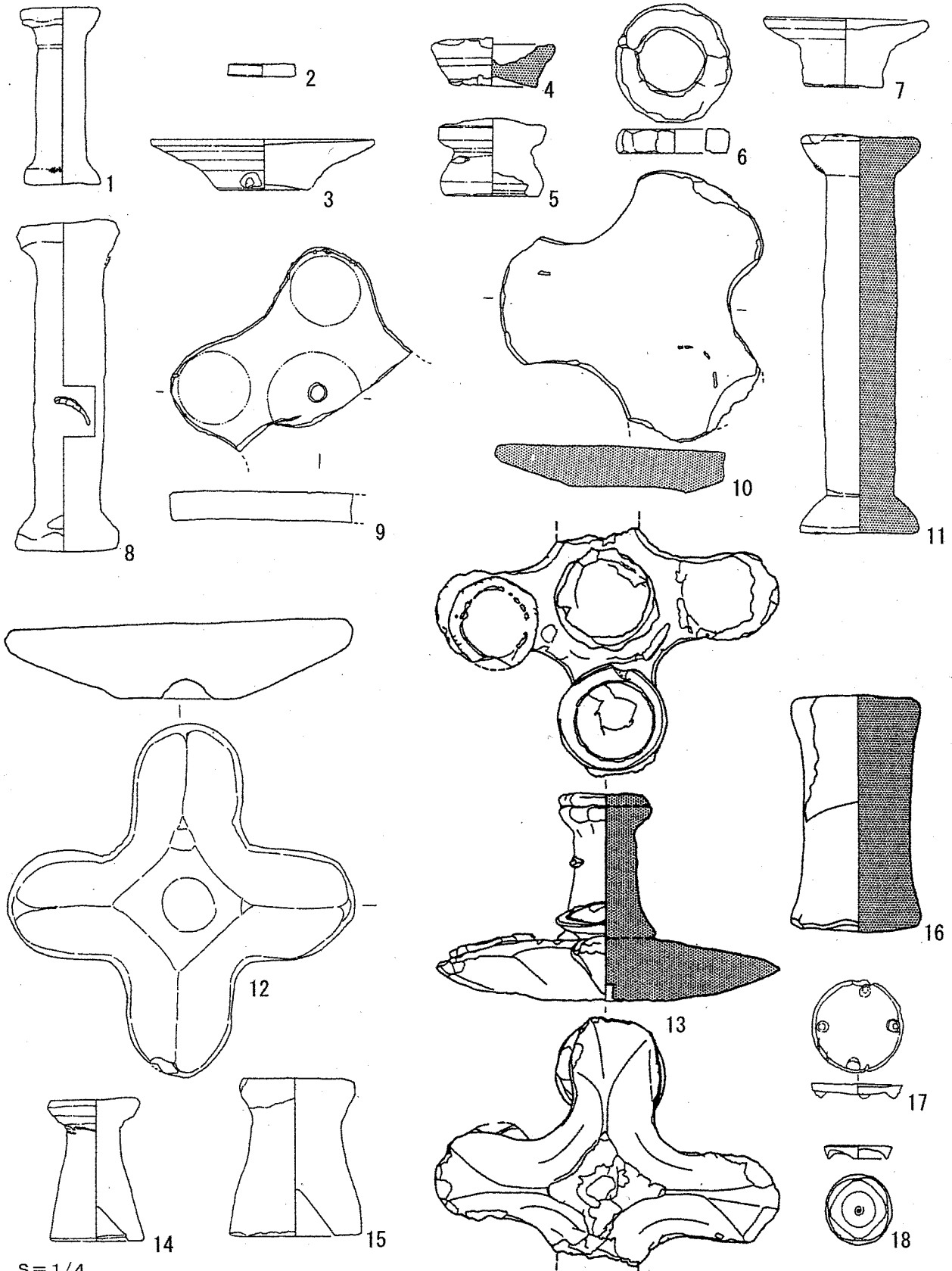
19世紀初頭には、17世紀代から碗の主力製品であった丸形碗は明らかにその生産を減退していく。とくに文化年間(1804～1818)には、筒形碗・朝顔形碗は姿を消し、替わって端反形碗・筒丸碗が新出する。文様装飾では、圏線内に五弁花及び寿字といった前代までの見込み中央部の基本スタイルは崩れ、格子文等様々な文様が入られるようになる。また、18世紀前半代から継承された外面コンニャク印判装飾は廃され、18世紀中葉より生産された青磁染付も消えていく。このように、19世紀初頭、とくに文化年間には、18世紀中葉に成立し受け継がれた製品様相に終止符が打たれ、新たな様相が確立されていることが分かる。

19世紀前半から19世紀中葉(1830～1860年代)までは、平形碗・筒端反碗・蛇の目凹形高台皿D類などが新たな器形として加わるものの、基本的に前代の様相が受け継がれている。

以上、波佐見諸窯における18世紀中葉から19世紀中葉にかけての製品推移を見てきたが、製品様相の大きな転換期は2度あり、その時期は18世紀中葉と19世紀初頭(文化年間頃)に求められる。その背景等については、後ほど考察の中で触れていきたい。

II 窯道具(図7)

波佐見諸窯における18世紀前半代の窯道具は、トチン(1)・円板状ハマ(2)・逆台形ハマ(3)が基本であり、窯によっては個別的にチャツ(4)・小型シノ(5)・輪状ハマ(6)・焼き台(7)などの各道具が付加されていた。このような窯道具の基本構成は、18世紀中葉に変化を迎える。



S = 1/4

1～3・5：百貫西窯、4・6・10・11：長田山窯、7～9：高尾窯

12・14：中尾上登窯、15・17：永尾本登窯、13・16：皿山本登窯、18：智恵治窯

図7 窯道具

18 世紀中葉とみられる高尾窯廃窯期床面からは、破損しているが、平らな粘土板を平面十字形に削り出したと想定される窯道具(9)が検出されている。残存する十字形の 2 箇所突出部各上面には、製品もしくはハマが載せられた痕跡が認められる。また、同じ 18 世紀中葉とみられる長田山窯廃窯期床面からは、断面逆台形を呈する粘土塊の上面端部を 3 箇所丸く削り、平面クローバー形に成形した窯道具(10)が出土している。この突出部各上面にも製品高台痕が残されている。これらの窯道具は、後述する「タコハマ」のプロト・タイプと想定される。また、両窯の床面からは高さ 20 cm を越える大型のトチン(8・11)が検出されているが、これはタコハマの支柱として使用されていたものと推測される。タコハマ及び大型トチンは、両窯ともに 18 世紀前半代の物原層からは確認されておらず、両窯の廃窯期、18 世紀中葉に出現する可能性が高い。

皿山本登窯では、18 世紀後半代、1760～1770 年代には、平面十字形・断面逆台形で下面中央にくぼみを持つタコハマが登場している。なお、この形状は 19 世紀後半代までほぼ変化は認められない(12)。表面には布目押圧痕が残され、先述のプロト・タイプとは異なり、型押しで成形されている。また、熔着資料から、タコハマ間の支柱として大型のシノ(13～15)を採用していたことが分かる。この大型シノは、18 世紀中葉段階には確認されておらず、タコハマの改良に伴って、当年代中にあらわれた道具と想定される。

18 世紀後半代の皿山本登窯では、窯室床面上にたてた大型のトチンにタコハマを載せ、その中央部に大型シノを設置し、更にその上にタコハマを載せて窯積めする、いわゆる「天秤積み」が行われていた。この立体的な窯積め法の導入によって、室単位面積当たりの生産量は、従前の平面的な窯積めよりも飛躍的に増大したものとみられる。これまでの調査事例では、18 世紀中葉以降に操業していた窯からは全てタコハマと大型シノが出土しており、波佐見諸窯では、18 世紀後半代に入ると、窯道具の基本構成にタコハマと大型シノが新たに加わり、それらを用いた天秤積みが普遍的に行われていたと想定される。

なお、タコハマについては、四つと八つの突出部を持つものが一般的である。波佐見では、前者を「四つ羽根」、後者を「八つ羽根」と呼称していた(波佐見町史編さん委員会 1976)。八つ羽根の出現期については今のところ不明であるが、皿山本登窯の 18 世紀後半代の物原層からは出土していない点から、恐らく 19 世紀代に登場するものとみられる。また、タコハマの支柱である大型トチンは、その時期は不明であるものの、「ヌケ」と呼ばれるトチンよりも太く寸胴な道具(16)に変化している。このヌケも皿山本登窯では 18 世紀後半代の遺物に含まれておらず、19 世紀代にあらわれた道具と想定される。

その他、18 世紀中葉以降に出現した窯道具としては、足

付きハマが挙げられる。円板状ハマに三角錐形の素地を貼り付けて足としたもの(17)と、丸盆形にロクロで成形し輪状部を数カ所抉って足としたもの(18)が見られる。足の数は 3 個あるいは 4 個が一般的である。先述したように、蛇の目凹形高台皿や端反形碗の見込みに足付きハマの熔着及び痕跡が認められることから、出現期については 18 世紀後半代～19 世紀前半代と考えられる。大橋康二氏は、「足付きハマが一般化するのはいわゆる広東形碗からであり、1780 年代以降であろう。」と述べている(大橋 1989)。

Ⅲ 窯体(図 8・9)

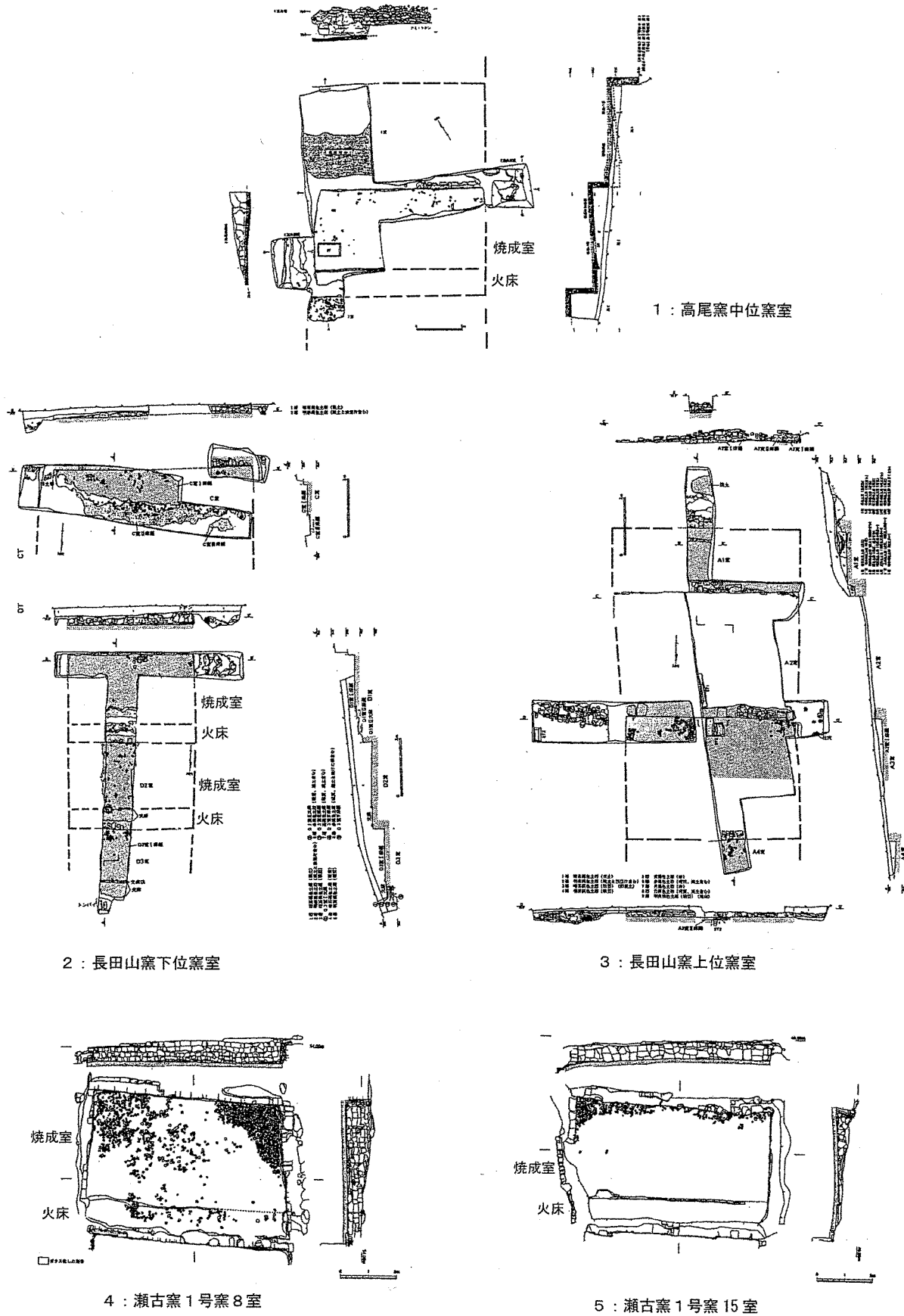
ここでは、18 世紀以降における波佐見諸窯の窯体についてまとめてみたい。まずは窯室数の規模・構造について、続いて、窯室数及び窯体規模について、その推移を見ていく。

まず、1 室の窯室規模については、前述した 18 世紀中葉の高尾窯では、窯体の下位に位置する窯室で幅 5.04 m・奥行き 3.3 m(中野 2004a)、中位の検出窯室で幅 7.2 m・奥行き 3.36 m(1)(中野 1996)、最上位室で幅 6.64 m を測った(中野 2004a)。また、長田山窯では窯体下位の窯室で幅 4.36 m・奥行き 3.04 m(2)、上位窯室で幅約 6.52 m・奥行き 4.41 m(3)を測っている(中野 1997)。肥前古窯における焼成室規模の分類(大橋 1986)によれば、以上は、18 世紀中葉を下限年代とする焼成室平均幅 5.6～7.3 m 程度の第 5 グループに属すると考えられ、年代的にも一致を見ている。

これまでのところ、18 世紀後半代～19 世紀中葉の間に廃窯したと確実に言える波佐見諸窯の調査事例は無く、18 世紀中葉以降の窯室規模について現時点では厳密には言及できない。

文化 2 年(1805)開窯、文政 10 年(1827)にその稼働が確実な長崎市瀬古窯 1 号窯の事例では、胴木間(1 室)幅 3.2 m・奥行き 2.18 m、窯体中位の窯室(8 室)で幅 7.16 m・奥行き 4.78 m(4)、最上位室(15 室)で幅 6.9 m・奥行き 5.38 m を測り(5)、全体的に幅 7.5 m・奥行き 5 m 内外の窯室規模であったことが明らかにされている(下川ほか 2000)。また、先述した大橋氏による焼成室規模の分類によれば、肥前では 18 世紀後半代に焼成室平均幅が 7.1～8.5 m 程度の第 6 グループが成立し、主に明治期まで継続されると考えられている。18 世紀後半代～19 世紀中葉における波佐見諸窯の窯室規模も以上とほぼ同様な数値を示していた可能性が高く、概ね焼成室幅 7～8 m 程、奥行き 4～5 m 程の規模を有していたものと推測される。

また、第 6 グループ段階に入ると、肥前諸窯は耐火粘土をレンガ状に成形したいわゆる「トンバイ」を側壁にも使用するようになるという(大橋 1986)。実際に、瀬古窯 1 号窯(下川ほか 2000)、有田町窯の谷窯(尾崎・村上 1989)などの 18 世紀後半代以降の諸窯では、側壁へのトンバイ



2 : 長田山窯下位窯室

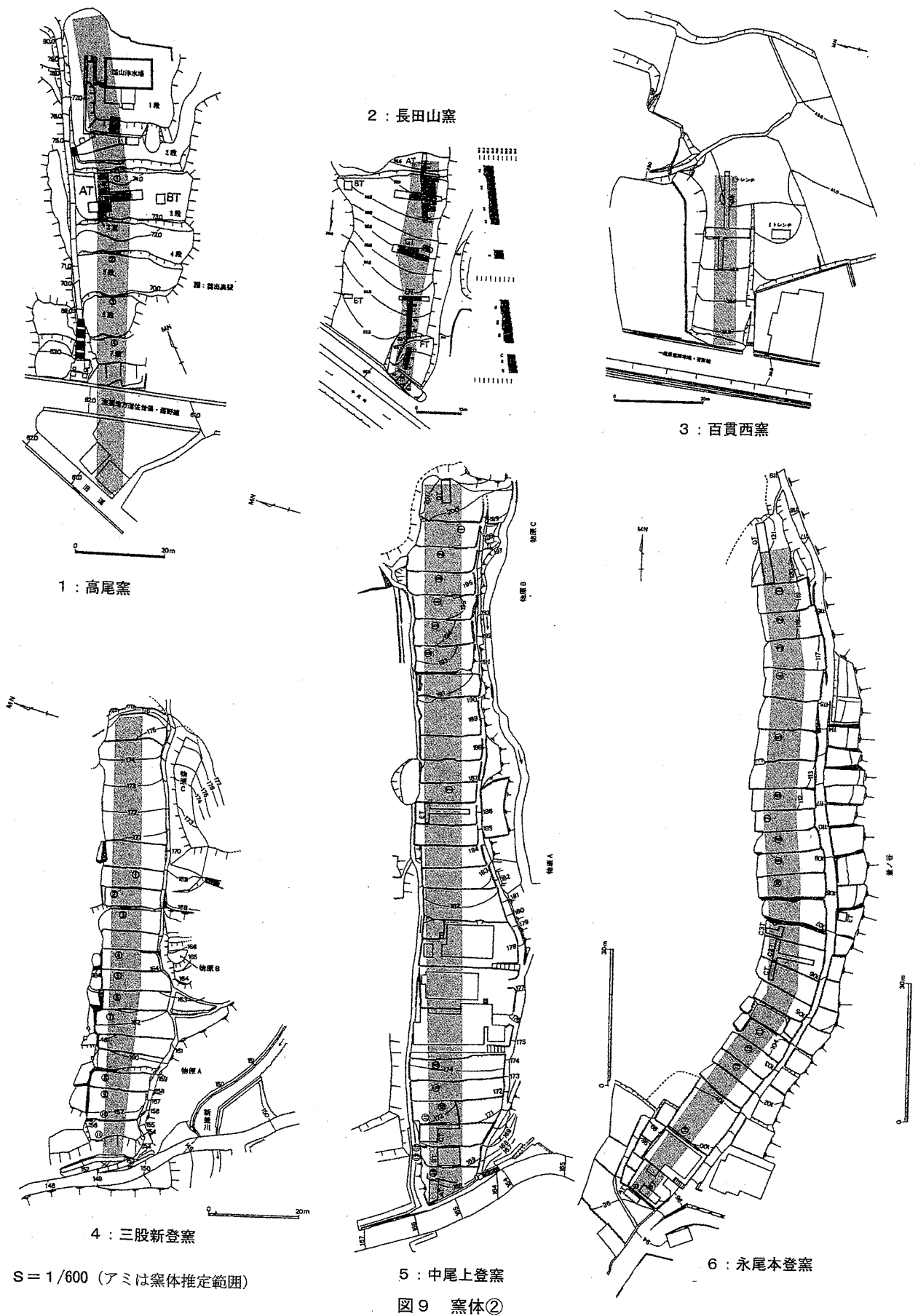
3 : 長田山窯上位窯室

4 : 瀬古窯1号窯8室

5 : 瀬古窯1号窯15室

S = 1/200

図8 窯体①



使用が普遍的に認められている。波佐見では、18世紀中葉に廃窯した高尾窯・長田山窯・百貫西窯では基本的に粘土で構築されており、他の諸窯と同じく、波佐見諸窯における側壁構築材としてのトンバイ使用も18世紀後半以降、一般化していくものとみられる。

続いて、窯室数・窯体規模について、まずは文献史料を基にその推移をまとめた(表3)。

元禄期の史料<『大村記・波佐見村』(古達編1986)、『大村見聞集』(藤野ほか編1994)>と、寛政期の史料<「近国焼物大概帳」>を併せ見ると、約100年の間に波佐見諸窯の窯室数は総数でほぼ2倍に増加していることが理解できる。また、寛政期の1窯平均窯室数は29.3室であるが、この頃の1室平均奥行き長は先述の通り、おおよそ4～5m代と考えられるため、寛政期、波佐見では、窯体全長100mを越える巨大な窯が普遍的に存在していた可能性が高いと言えよう。続いて、『郷村記』(藤野編1982)に見られる19世紀中葉、安政3年(1856)頃の史料からは[註2]、寛政期と比べ1窯平均窯室数は減少するものの[註3]、依然、100mを越える規模は全体的に維持され続け、また、全窯室数については増加を見せている。

以上から、波佐見諸窯では、17世紀代末から18世紀代後半にかけて窯室数を倍増させており、寛政期には100mを越える巨大な窯が普遍的化し、その様相がそのまま19世紀中葉まで継承・発展していたことが理解できる。

18世紀中葉に廃窯した高尾窯は、廃窯期の窯体が全長100m・窯室数23室程に及ぶことが判明しており(1)、波佐見では、既に18世紀前半代のうちに巨大な窯が存在した可能性は高い。しかし、高尾窯と同時期、18世紀中葉に廃窯した長田山窯では、廃窯期の窯体全長は最大に見積もって50m程、窯室数も15室程度であり(2)、高尾窯の規模には遠く及ばない。また、同じく18世紀中葉に廃された百貫西窯も、36m+ α 程の全長しかなかった(3)。

中尾・三股地区など、波佐見窯業の中核的窯場における、18世紀前半代の窯体規模は未だ判明していないため断定はできないが、その後の流れを考慮に入れると、18世紀前半代～中葉にかけて、中尾・三股地区には高尾窯に比肩する規模を有する窯が存在していた可能性は高い。このことから、18世紀前半代～中葉にかけては、100mを越える巨大な窯(高尾窯など)と、それに満たない小・中規模の窯(長田山窯・百貫西窯など)が併存し稼働していたことが想定される。しかし、その後、18世紀中葉から18世紀後半代には齊一的に窯の長大化が図られ、文献史料に見たように、遅くとも寛政期には、波佐見において巨大な窯は普遍的に存在していたものとみられる。

IV 考察

以上、波佐見諸窯における18世紀中葉から19世紀中葉

にかけての製品、窯道具、窯体の推移を概観した。ここでは、各推移に基づきながら、当年代における波佐見窯業の動態について考えてみたい。

波佐見諸窯では17世紀中葉には、重ね焼きを意図した見込み蛇の目釉剥ぎの染付・青磁皿の生産が開始されており、磁器の量産はこの段階から既に始まっている(中野2000b)。そして、17世紀後半代には、海外への大量輸出を契機に生産機構は整えられ、また、実際の輸出品の大量生産を通して、量産技術に関する様々なノウハウが培われていった(中野2001b)。

17世紀末～18世紀初頭、海外市場から国内市場の開拓に転換すると、その蓄積されたノウハウを基にし、更に、コンニャク印判装飾、見込み蛇の目釉剥ぎによる染付碗の重ね焼きなど、新たに登場した量産技術を導入して、18世紀前半代には、従前とはスケールが異なる磁器大量生産体制を構築する。

しかし、18世紀前半代、大量生産を具体的に表象する巨大窯は、長田山窯、百貫西窯の例に見たように、全ての波佐見諸窯に浸透しているわけではなく、いわば「窯単位」の大量生産であった。また、この年代の製品は量産はされていたが、器形数に関して言えば後代と比較すると著しく少なく、このことから基本的に「少品種」の大量生産であったと言える。

18世紀前半代の波佐見諸窯における大量生産体制は、以上のような特質を持っていたとまとめられるが、それでは本稿の主眼である18世紀中葉以降の波佐見窯業、また、その大量生産体制はどのような動きを見せていくのか、以下、見ていこう。

18世紀中葉に入ると、製品の器形数は急増し、製品様相には非常に大きな変化があらわれる。このことは、「少品種」から「多品種」へ生産内容が転換したことを物語っている。また、当年代には、天秤積みを使用されるタコハマのプロト・タイプが出現し、更なる量産化への萌芽が認められる。

長田山窯は18世紀初頭～前半代にかけて、他の諸窯には見られない青磁生産に特化した生産が行われていた。また、18世紀前半代の百貫西窯では陶胎染付の量産に加え、有田様呂谷窯製品と類する染付皿の優品などが同時に焼かれている。18世紀前半代の両窯は、他の波佐見諸窯とは一線を画した個性的な製品の生産を行っていた。更に、両窯ともいわゆる「波佐見四皿山」から地理的に離れた場所に築かれている。これ程、内容且つ立地的に「個性」を持つ窯は、18世紀中葉に廃された両窯を最後に、以降19世紀中葉まで波佐見諸窯にあらわれることは無い。このことから、18世紀中葉の長田山窯と百貫西窯の廃窯は、窯場が「永尾山」、「三股山」、「中尾山」、「稗木場山」のいわゆる「波佐見四皿山」に収斂されていく過程を示す一つの事例

であり、また、窯毎の製品個性が排除され、製品内容の平準化が進められたことを伝える事件と言えよう。

このような集約的・斉一的な生産体制を導出する一要件として、政治的な権力の介入、具体的には、大村藩による窯場の統合・統制が行われた可能性が想起される。しかし、その具体的様相を今に伝える文献史料は全く残されていない。ただ、寛保3年(1742)、大村藩が升屋五郎右衛門ほか3名の大坂焼物問屋と取引を開始した契約証が存在し(中島1936)、18世紀中葉に入り、大村藩が販売市場に直接に販売機関を設置する「専売制」を導入していたことが理解できる。時代はやや下るが、安永期(1772～1780)の『難波丸綱目』に記載されている「大村なみ物問屋」は(大橋1988)、専売制的取引を行っていた問屋の可能性もある。また、延享2年(1745)の記録を見れば、その頃の波佐見諸窯では、窯場にきた商人に生産者が直接的に製品を売る「地下売」が行われ、大村藩はそれらの製品に対し課税を行っていたことが分かる(大村史談会編1995)。

窯場の統合・統制を具体的に示す史料は見当たらないものの、以上の事例から、18世紀中葉に入り、大村藩が波佐見諸窯に対し、前代よりも直接的且つ積極的な介入を行ったことは間違いない。それは同時に、藩財政における収入源としての「波佐見窯業」の位置づけが、以前よりも遙かに重視されるようになったことを意味している。18世紀前半代、波佐見諸窯には個人所有の窯も存在し[註4]、それぞれが直接的に商人との契約の上、各自、様々な製品を生産・出荷していた場合もあったと予想されるが、18世紀中葉になると、財政政策の一環として波佐見窯業への積極的介入が意図された結果、個人所有の窯は廃され、管理の利便性及び掌握のために大村藩による一元的な集中管理が強化されたものとみられる。その結果として、18世紀中葉には上述のような窯場の限定性及び製品の平準化が進んだのであろう。なお、18世紀中葉の大村藩の積極的介入は、裏を返せば、18世紀前半代以降、波佐見窯業における磁器大量生産が、それだけ莫大な利益を産み出していたことを示している。

以上のように、18世紀中葉は、前半代の「少品種」から「多品種」へ、また、増収を目的とした大村藩の政治的介入により、「窯単位」から、波佐見諸窯という「窯業圏単位」へと、大量生産体制が移行していく段階とまとめられよう。

18世紀後半代～19世紀初頭にかけては、製品様相については前代と比して隔絶した変化は認められない。しかし、18世紀後半代には、改良され定型化したタコハマと大型シノを用いた「天秤積み」が波佐見諸窯で普遍的に採用されるようになる。また、後半代から側壁構築材としてのトンバイ使用が普及したと予想され、窯は従前よりも堅牢となり、長期に亘る安定的な生産が可能となった。そし

て、波佐見諸窯では遅くとも寛政期までには全長100mを越える巨大窯が普遍化している。

このように、18世紀後半代～19世紀初頭は、中葉に萌芽した「多品種大量生産」という生産体制が確立し、深化していった段階と捉えられる。この段階にみられる天秤積み の普及とトンバイの使用、窯の長大化は、従前に比べ飛躍的な生産量の増大をもたらすことになった。

宝暦～天明期(1751～1789)、商品生産の地域的拡散に伴う市場構造の転換が進められ、また、地方商人の台頭による新たな流通機構が確立した時期にあたり、国内の商品生産・流通は急速な進展をみせていた(藤田ほか1978)。また、明和～安永期(1764～1781)は、銭貨の鑄銭量は江戸各期を通じて最大規模であり、「このことはたんに都市のみならず、農村まで銭貨の需要増大を予想させ、また銭の流通が農村でも促進される方向にあった」と推定されている(吉原2003)。以上のような18世紀後半代の市場構造の転換、流通網の拡大、貨幣経済の全国的な浸透傾向を背景とする潜在的な磁器需用者層の拡大は、18世紀後半代～19世紀初頭の波佐見窯業における大量生産体制の存立基盤となったとみられる。また、量産化に伴う生産コストの削減は、安価な磁器供給を可能とし、磁器需用者層の更なる拡大に拍車をかけていった。

ところで、大量生産体制を維持するためには、勿論、工人一人一人の高度な技術が要されるが、それと伴に「分業体制」を整え、効率的に各作業を連携・遂行していく必要がある。先に見たように、17世紀後半代から波佐見諸窯では量産化が開始されており、当時から既に分業体制は行われていたとみられるが、18世紀後半代以降の大量生産体制の深化に伴い、その効率性を確保するためにも、各作業の細分化・専門化は著しく進展したものと予想される。当年代以降、タコハマなどの窯道具は波佐見諸窯で定型化・均一化し、とくにタコハマについては型押し成形によって量産されているが、このことは、それまで各窯各自で行われた窯道具の生産が分離・独立して、窯道具専門の工人層が出現し、彼らが分業体制の構成要素の一つに取り組み機能していた結果によると推測される。

なお、分業体制は生産工程のみならず、窯・窯場における製品の作り分けも考慮する必要がある(野上1997)。18世紀後半代以降、稗木場地区の皿山本登窯ではほぼ染付碗の生産に終始しており、一方、三股地区諸窯においては染付皿・徳利生産を主体としていた(中野2000a・2004b)。恐らくこの差異は、稗木場地区が陶石場から遠く離れ、陶土を潤沢に使用できない環境にあったが、三股地区は陶石場を抱えているために、碗と比べ比較的陶土の量が必要とされる皿や徳利生産が行い易い環境にあったことによる。このような環境的特性をも配慮した製品の分業体制が、18世紀後半代以降、波佐見諸窯では構築されていたと

みられる。

更に、窯の長大化に伴う大規模な土木工事〔註5〕のための集約的な労働力の投下、また、巨大窯の燃料となる大量の薪材を安定的に供給・確保するための計画的な植林及び伐採規制〔註6〕など、藩による強制力を伴った政治的権力の行使は、大量生産体制を維持するためには必要不可欠であったと思われる。

19世紀初頭に入ると、とくに文化年間には、18世紀中葉以降引き継がれて来た様相は払拭され、新たな製品構成に転換している。しかし、波佐見窯業の基本的な体質・構造はそのまま継承された。先述したように、寛政期以降も波佐見諸窯の窯体規模は長大化の傾向が認められ、安政期までには地理的限界まで窯室を増設している。このように、18世紀末～19世紀中葉において、窯体規模の面から見れば、波佐見諸窯の「多品種大量生産」体制はその頂点を極めたと言えよう。なお、三股新登窯では、地形的にこれ以上の窯室は望めない最上位窯室の周辺に、「文化二乙丑歳 奉寄進新登中 五月吉良日」と刻印された石塔が残されている(中野2004b)。この石塔は、文化2年(1805)、窯室数の増設後、記念碑的な意味合いで造立された可能性がある。断定はできないものの、他の波佐見諸窯も、ちょうどこの文化年間頃に、同様な窯の増設の動きがあったかもしれない。

18世紀後半～19世紀前半代は、地方窯が各地で築かれ(大橋1989)、とくに19世紀初頭には、瀬戸・美濃窯という大規模な窯場が磁器生産に参画している。当然、波佐見製品の市場圏の一部はそれらの窯場に奪われたであろうが、上述したように、波佐見諸窯の量産体制は依然発展を遂げ、波佐見窯業の全体的規模は拡大している。このことは、当年代、波佐見製品が、地理的及び階層的に新たな市場圏を獲得したからに他ならない。

天保期(1830～1844)、大坂への商品廻着量は化政期(1804～1830)に比べ減少しており、とくに「瀬戸物」の廻着量は三分の一まで激減している。このような大坂への廻着量の減少は、諸藩の専売制や地方商人の直売買によって、大坂の間屋を経由せずに直接消費地に積み送られたためとされている(藤田ほか1978)。このことは、化政～天保期にかけて、筑前商人(前川1990・野上1998)をはじめとする地方商人の更なる活発化により、新たなやきもの流通網が開拓されたことを物語っている。また、18世紀後半から19世紀前半にかけての江戸地廻り経済圏の発達、旧来の大坂を中心とする一元的な流通機構を打破することになり(桑田2000)、新たな流通網、そして、波佐見製品の新たな磁器需要者の獲得に繋がったものと予想される。

18世紀中葉～19世紀中葉にかけて、波佐見諸窯における製品様相は変化を遂げているが、18世紀中葉と、19世紀初頭、とくに文化年間にその画期が求められることは先

述の通りである。この製品様相の画期は、上述した国内流通・経済機構の変化がその基層にあると言えるが、ここでは、別の視座から、画期を現出させた背景について考えてみたい。

現代にも通じることであるが、とくに、美術工芸品的要素が希薄な大量生産による日用品の場合、生産者側は、とにかく受注された製品の生産を機械的に行うのみであり、新たな製品開発を積極的に行うことは少ない。つまり、製品様相の変化については、基本的に生産者側は無関係であり、商人を含む消費者によって導出されるものであると言える。よって、製品様相の変化の背景を探るためには、消費者層、とくに波佐見の場合は、主要な消費者層と想定される江戸期庶民層の動向が重要な鍵となる。ここで、原田信男氏による、料理本等の研究に基づいた江戸期料理文化の動向について見てみたい(原田1989)。「器」と「食」は密接な関係にあり、製品様相の変化には、食品、料理法、食する場、食に対する意識の変化など、「料理文化」、広義には「食文化」の変化が内在すると思うためである。

原田氏によると、元禄期(1688～1704)、都市部上層町民に限定されていた料理文化は、享保年間(1716～1736)には都市部中・下層へ浸透していく。宝暦～明和年間(1751～1764)からは江戸市中に料理屋が増え始め、その後、天明年間(1781～1789)にかけて都市部中・下層を中心とした料理文化が花開く。寛政期(1789～1801)、奢侈を禁じた寛政の改革によって一時停滞するものの、化政期(1804～1830)には、料理文化は再び息を吹き返し、都市のみならず地方、更には農民層にまで広がっていく。その後、江戸期料理文化は、天保の改革を契機にして急速に衰退していくという。

原田氏は、江戸期料理文化の動向を以上のように提示し、中でも、宝暦～天明期と化政期の料理文化の隆盛を指摘されている。その主役はいずれも庶民層であるため、各年代は、「江戸期庶民層における食文化の隆盛時期」と換言できよう。各隆盛時期の始まりは宝暦年間(1751～1764)、文化年間(1804～1818)であり、これは、先に見た波佐見における製品様相の画期とはほぼ合致している。

それでは、波佐見窯業における18世紀中葉～19世紀中葉の製品様相の変化について、上述した庶民層の動向を加味しながらまとめてみたい。

18世紀中葉、宝暦期に都市部中・下層を中心とした庶民層の食文化は発展を開始し、それに伴って新たな器が求められるようになる。その結果、波佐見諸窯では前代とは異なる製品様相を持つ器が産み出されることになる。この製品様相は18世紀前代とは隔絶したものであり、そこには、文化の担い手であった都市部中・下層庶民層の「食」に対する大きな意識変革が内在していたことが窺える。以降、天明期にかけての食文化の広まりの中、庶民層の更に増大

した需要に対して、波佐見窯業は窯体規模の長大化を推し進めることでこれに応える。この段階、製品様相には前代のような過激な動きは認められない。これは宝暦期に始まる食文化の「質」が、基本的にそのまま継承されたことを意味するのであろう。そして、化政期に、需要層が地方・農民層に至るまで広がりを見せた結果、新たに参入した需要層の嗜好に応じ、あるいは、新たな食文化への庶民層の期待の中で、波佐見窯業は、宝暦期以降継承されたものとは異なる新しい製品様相を形成していく。同時に、より広範となった需要層に対して、地形的な限界まで窯室を増設し、数限りない膨大な量の製品を送り出していたものとみられる。

17 世紀後半以降の波佐見窯業の特質は、磁器の「大量生産」にあったといつて過言ではない。18 世紀前半代～中葉、技術的・政治的・経済的背景のもと、大量生産を支える基礎的な体制作りが進み、そして、18 世紀後半代には、巨大窯を擁する磁器の「大量生産体制」が完成する。以降、幕末期、19 世紀中葉まで発展を遂げていった。その体制を産み出し、支え続けた背景には、幕藩体制下における政治・経済的動向、技術的・産業構造的発展など様々な要因が認められる。しかし、最も根元的な点は江戸期庶民層の意識変化といった内的発展にあると言えよう。波佐見窯業の大量生産体制は江戸期庶民層の歩みと同調し、展開していったのである。

おわりに

本稿では、18 世紀中葉～19 世紀中葉の波佐見窯業について、窯業を構成する諸要素の推移を軸に、波佐見窯業の特質とも言える大量生産体制の動態を中心に描写してみた。

しかし、テーマの壮大さに筆者の力は及ばず、本稿は、いわば、アウト・ラインのみが描かれたエスキース（習作）段階に留まっている。今後、波佐見諸窯の調査成果に、他の生産地遺跡及び消費地遺跡の成果、更には文献史学の成果という、色とりどりの美しい絵筆を加え、波佐見窯業の「大量生産体制」をより鮮明に、より具象的に描き出し、江戸期庶民層の力強く豊穡な文化を少しでも表現できればと願っている。

謝辞

有田町歴史民俗資料館の野上建紀氏と村上伸之氏が、日頃与えて下さる有益な助言と刺激的なサジェスションは、本稿をまとめる上で大いに参考となりました。記してお礼申し上げます。

最後になりましたが、絵ばかり描いて授業にはほとんど出席しない史上稀に見る最低学生であった私に、近世考古学への道を示して頂き、更に、陶磁史の面白さ・奥の深さを教えて下さった佐々木達夫先生には、ここに記して、心から感謝申し上げます。

[註 1] 『守貞漫稿』(喜多川 1853) による。「…朝顔形茶碗 口径二

寸六七分外准成。筒形碗 口径同上 文化此迄ハ上ノ二品ヲ専用ス。筒茶ワンハ下品用也。文化以来ヨリ小ニテ図ノ如キ(筆者註: 本稿で言う「筒丸碗」)ヲ三都トモ専用ス。始メ煎茶口行用之シヨリ、今ハ平日用モ専之シテ、上ノ二品廢セリ。筒形ハ特ニ廢セリ、…」

[註 2] 『郷村記』首巻(藤野編 1982)には、「總巻載ル所ノ諸事、年限一定ナラスト雖モ、石高・諸納物、竈・人・牛・馬等ノ員数ハ、大概安政三年ヲ以テ定額トス」とあり、『郷村記』のデータは概ね安政 3 年(1856)段階のものであることが記されている。これまで、『郷村記』の様々なデータを使用する際、波佐見町教育委員会が所蔵する最終稿『郷村記』の、江戸期写本の裏表紙に墨書してある「天保十五年十月調製」から、無批判的にその年代を「天保年間頃」としていたが、この墨書を実際に確認してみると、「上波佐見村役場印」の押印が見られ、明治期以降に書かれたものであることが判明した。また、波佐見教育委員会には他に『天保十五年 辰十月 郷村記 下波佐見村』が残されているが、その内容・形式ともに、最終稿『郷村記』とは大きく異なり、これは編纂過程のものであると判断された。恐らく、上波佐見村役場の方が『郷村記』という同じ表題から誤解して、最終稿『郷村記』に「天保十五年」と書き込んだしまったようである。以上から、最終稿『郷村記』のデータは首巻に書かれてあるごとく「安政三年」頃のものである可能性が高い。よって、今後、最終稿『郷村記』のデータについては、幕末期、安政 3 年頃のものとして取り扱っていきたい。

[註 3] 寛政 8 年(1796)の「近国焼物大概帳」<『上田家文書』>には、寛政期、三股地区には 2 基の窯が操業していたとしている(「一 三俣皿山 竈二登 此数七拾五軒 右同断」)。しかし、物原採集資料を見れば、当年代頃は、3 基の窯が稼働していた可能性がある。これが事実であれば、寛政期の 1 窯平均窯室数は 25.6 室となり、安政期よりも少ない値となる。

[註 4] 正徳年間(1711～1716)頃編纂されたとされる『皿山旧記』(太田 1962)によれば、大新窯には「但松尾儀左衛門相立候…」、長田山窯には「但中野郡兵衛相立候…」、百貫西窯には「但朝永貞平相立候…」とあり、それぞれの操業開始時に個人の介在があったと想定される。また、『大村記・波佐見村』(古達 1986)には「同所(筆者註: 稗木場山)新釜」の項に、「右貞享五戊辰年佐賀領小城において藤五左衛門と云者依頼に釈免は取立なり」とあり、窯の操業に個人が介在していたことが予想できる。

[註 5] 巨大窯の最上位室近辺は山裾部を削り平坦面を造出して、そこに窯体を築いている場合が一般的である。窯によっては 10 m 以上、山裾部を削り取った場合(三股新登窯など)もあり、工事にはかなりの人数が要されていたものとみられる。

[註 6] 具体的な記述は、管見するところでは見当たらないが、『見聞集』に、「…長與皿山出後候以降、長崎江壳出候薪無之故…」<『見聞集』六十(藤野ほか 1994)>とあり、長与窯の築窯以降、長崎へ売り出す薪は無い、との記載がある。このことから、窯業用の薪保護のために、木材の伐採を禁じたことが窺える。これは、波佐見でも同様であったと予想される。

引用・参考文献(著者名五十音順)

池田悦夫編 1995 『市ヶ谷本村町遺跡 尾張藩徳川家上屋敷跡』

新宿区市谷本村町遺跡調査団

上山佳彦 1997 「山口県下関市騎兵隊陣屋跡出土陶磁」『第 7 回九州近世陶磁学会資料』九州近世陶磁学会

太田新三郎 1962 『波佐見地方陶祖の探究』波佐見町教育委員会

大橋康二 1986 「肥前古窯の変遷—焼成室規模よりみた—」『佐

- 賀県立九州陶磁器文化館 研究紀要』第1号
 大橋康二1988『西有田の古窯』西有田町
 大橋康二1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
 大村史談会編1995『九葉実録』第二冊 大村史談会
 尾崎葉子・村上伸之1989『窯の谷窯・多々良の元窯・丸尾窯・樋口窯』有田町教育委員会
 喜多川守貞1853『守貞漫稿』(宇佐美英樹校訂1996『近世風俗志(五)』岩波文庫)
 九州近世陶磁器学会編2001『国内出土の肥前陶磁 東日本の流通をさぐる』九州近世陶磁器学会
 九州近世陶磁器学会編2002『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる』九州近世陶磁器学会
 桑田優2000『日本近世社会経済史』晃洋書房
 後藤宏樹編1994a『尾張藩趣町邸跡』新日本製鐵株式会社・紀尾井町6-18 遺跡調査会
 後藤宏樹編1994b『和泉伯太藩上屋敷跡』帝都高速道路交通営団・地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会
 後藤宏樹編1995『和田倉遺跡』千代田区教育委員会
 下川達彌・時枝克安・成亨美・宮下雅史2000『瀬古窯跡』長崎市埋蔵文化財調査協議会
 中島浩氣1936『肥前陶磁史考』肥前陶磁史刊行會
 中野雄二1994『下榎木場窯跡・永尾高麗窯跡・三股古窯跡』波佐見町教育委員会
 中野雄二1996『I 高尾窯跡 II 岳辺田郷圍場整備に伴う確認調査』波佐見町教育委員会
 中野雄二1997『長田山窯跡』波佐見町教育委員会
 中野雄二1998『17世紀末から18世紀初頭の波佐見窯業』『研究紀要』第7号 有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館
 中野雄二1999『皿山本登窯跡・皿山役所跡』波佐見町教育委員会
 中野雄二2000a『三股本登窯跡』波佐見町教育委員会
 中野雄二2000b『波佐見』『九州陶磁の編年』九州近世陶磁器学会
 中野雄二2001a『智恵治窯跡』波佐見町教育委員会
 中野雄二2001b『波佐見製品の海外輸出—17世紀後半代を中心として—』『西海考古』第4号 西海考古同人会
 中野雄二2002『18世紀中葉～19世紀中葉の肥前染付—波佐見製品を中心に—』『関西近世考古学研究』X 関西近世考古学研究会
 中野雄二2004a『高尾窯跡』波佐見町教育委員会(刊行 予定)
 中野雄二2004b『三股新登窯跡』波佐見町教育委員会(刊行 予定)
 成瀬晃司2000『江戸遺跡における実年代資料』『近世の実年代資料』関西近世考古学研究会
 野上建紀1997『肥前における磁器産業—生産施設及び環境を中心に—』『研究紀要』第5号 有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館
 野上建紀1998『海揚がりの肥前陶磁—玄界灘を中心に—』『研究紀要』第7号 有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館
 波佐見町史編さん委員会編1976『波佐見史』上 波佐見町役場・波佐見町教育委員会
 原田信男1989『江戸の料理史 料理本と料理文化』中公新書929 中央公論社
 藤田貞一郎・宮本又助・長谷川彰1978『日本商業史』有斐閣
 藤野保編1982『大村郷村記』第一巻・第三巻 国書刊行会
 藤野保・清水紘一編1994『大村見聞集』高科書店
 古達廣栄編1986『大村記・波佐見村』波佐見町教育委員会

Michael J. Piore・Charles F. Sabel 1993 『第二の産業分水嶺』筑摩書房

前山博1990『伊万里焼流通史の研究』自費出版

宮崎貴夫・村川逸朗1993『波佐見町内古窯跡群調査報告書』波佐見町教育委員会

宮崎貴夫・川口洋平・中村幸2002『長与皿山窯跡』長与町教育委員会

吉原健一郎2003『江戸の銭と庶民の暮らし』同成社

図版出版

図1・2:筆者作成、図3-1・2、図6-4、図7-4・6・10・11、図8-2・3、図9-2:中野1997より転載。図3-3・5~7・9・10、図7-7~9、図8-1、図9-1:中野1996より転載、図3-4、図4-2・12~24、図5-1・3、図6-3・10・11、図7-1~3・5・12・14・15・17、図9-3~6:宮崎ほか1993より転載。図3-8・11~21、図5-2:中野1999より転載。図3-22:宮崎ほか2002より転載。

図4-1・3~11・25:中野1999より転載。図5-4、図6-12:中野2000bより転載。図5-5、図8-4・5:下川ほか2000より転載。図5-6:大橋1988より転載。図6-1・2:中野1994より転載。図7-18:中野2001aより転載。

付記

本稿は、第14回関西近世考古学研究会研究大会で紙上発表した論考(中野2002)を大幅に加筆・修正したものである。

<波佐見町教育委員会>

表1 波佐見製品を中心とした18世紀中葉～19世紀中葉における碗・鉢・皿の変遷

～	1740	1740～1760	1760～1770	1780～1810	1810～1860	1860～
碗・鉢 外面・内面 装飾ほか		外面 コニヤク印判 青磁染付 二重 圓線内印判五弁花文	二重 圓線内印判五弁花文 一重 圓線内寿字文A 一重 圓線内寿字文B 一重 圓線内寿字文C	一重 圓線内寿字文B 一重 圓線内寿字文C 軸剥ぎ部白濁アルミナ塗布 格子文等		
碗	丸形碗	丸形碗 雪輪草花文・二重網目文・八つ橋草花文碗 筒形碗A 半球形碗A	丸形高台内傾碗 丸形高台外傾碗 筒形碗B 半球形碗B 1	筒形碗白磁・鉄釉 半球形碗B 2		
鉢	丸形鉢 端反形鉢	朝顔形碗 朝顔形碗染付 朝顔形碗青磁染付	朝顔形碗 朝顔形碗染付 朝顔形碗青磁染付	筒形碗 半球形碗B 1 広東形碗	端反形碗 筒形碗 ?	平形碗 筒形碗 端反碗
皿	丸形小皿A 二重斜格子文皿 菊唐草文皿 深皿 蛇の目凹形高台皿A	丸形鉢 端反形鉢	丸形小皿B ?	朝顔形鉢	丸形小皿C	蛇の目凹形高台皿C 蛇の目凹形高台皿D

*註：表中の実線は生産量が多い段階、破線は少ない段階を示す。？は不確定要素が強いもの。

表2 18世紀中葉～19世紀中葉における染付碗・鉢・皿の器形推移

	器形	18c前半代	18c中葉	18c後半代	18c末～19c初	19c初～19c前	19c前～19c中
		1700～1740年代	1740～1760年代	1760～1770年代	1780～1810年代	1810～1830年代	1830～1860年代
碗	丸形碗						
	丸形高台内傾			○			
	丸形高台外傾			○			
	筒形碗A		○				
	筒形碗B			○			
	半球形碗A		○				
	半球形碗B			○			
	朝顔形碗		○				
	広東形碗				○		
	端反形碗					○	
	筒丸碗					○	
平形碗						○	
筒端反碗						○	
鉢	丸形鉢						
	端反形鉢		○				
	朝顔形鉢				○		
皿	丸形小皿						
	丸形五寸皿						
	深皿	○					
	蛇の目凹形A～C		○				
	蛇の目凹形D						○
器形数	5	10	13	13	10	11	
新出器形数	1	5	4	2	2	3	
新出器形の割合	20%	50%	31%	15%	20%	27%	

*注 ・ここではあくまでも「形」の相違を重視している。文様の相違は含めていない。
 ・濃いアミは生産量の多い段階、薄いアミは生産量が少ない段階。
 ・○は新出器形を示す。

表3 文献資料にみる17世紀末～19世紀中葉における波佐見諸窯の窯室数

地区	窯名	操業年代	最大全長	古文書に見る窯室数(単位:室)			
				大村記・波佐見村 皿山之事	見聞集 諸納運上の事	近国焼物大概帳	郷村記
皿山	高尾窯	1670-1750	約100m	13	約28		
	皿山本登窯	18c-1930	約110m	6		約30(1基)	20
中尾	中尾下登窯	1660-1940	約120m	39	約63		約80(3基)
	中尾上登窯	1640-1920	約160m				33
	大新窯	1680-19c	160m以上				39
永尾	永尾本登窯	1660-1950	約155m	13		約20(1基)	29
	木場山窯	1660-18c		5			
三股	三股本登窯	1650-1940	約120m	28		75(2基)	24
	三股新登窯	17c-1920	約100m				21
	三股上登窯	18c-19c	約120m			?	23
窯室計				104	約91	約103	205
1窯平均窯室数				11.6	約10.1	約11.4	約29.3
古文書編纂年				元禄元年頃 1688頃	元禄4年頃 1691頃	元禄10年頃 1697	寛政8年 1796
							安政3年頃 1856頃

*注 ・アミは当時稼働していたと推定される窯。
 ・18・19世紀に操業していた窯は他にも存在するが、ここでは古文書編纂年当時に稼働していた窯のみを取り上げた。
 ・最大全長は地形測量に基づく。空欄は不明。
 ・?は文書には残されていないが、物原採集資料等からみてこの時期に存在していた可能性を持つもの。
 ・「皿山之事」と「諸納運上の事」の編纂年代は、中野1998による。